1 レナとの出会い
 あれは、数年前の話。とある依頼でレナと出会った
 依頼の内容は、ある洞窟にいる魔女の討伐、もしくは説得
といったところだ。一見、引きこもりのようだがそうでもなく
これまで、何人も挑戦したが返り討ちどころか、リタイアして
逃げた人もいる、そのために引き受ける人がいないため、この
依頼を引き受けることにした。一応、これでも依頼屋というよりは
この世界では能力者と言われていて、俺の能力は（絶）という
能力で、触れた物を無力化する事や、体に纏えば装甲として使えるし、
対象の物を切ると、能力の遮断や縁切りにもなる、便利な能力を持っている。
そのため、断ち切り刃と能力者達からは言われている。
 ただ、依頼を見てふと思った事がある。今まで受けた能力者はどれも
能力としては強い人が受けているが、達成されていない。となると、
相手は相当な能力者か、何かしら理由のある人だと航海は思った。
 そのため、依頼を引き受けるに当たって覚悟を決めた。相手は、今までに無い
相手で最悪の場合を想定して、洞窟に入った。
 洞窟の中は、意外と寒くなく暑くなく、環境は、丁度良かった。ただ、一本道
だったから迷う事はなかったが、なぜ、こんな単純にしたのか、疑問に思った。
そうこうしているうちに、洞窟の最深部に着いた。そこはかなり広く、また、天井も高い。
 そこに1人の少女がいた。桃色な髪で短く、顔は一見すると幼く見える。体型は
その幼さとはかけ離れているくらいだった。胸は、スイカが入っているくらい大きく、特に、
お尻は、布越しでも分かるくらい大きかった。服装は、ローブを着ていたので幸いの事態はな
かった。
「そこで何しているの？」声をかけられた。
俺は
「こっちは依頼であんたを討ば…違った、説得しにきた。」といった。
すると、
「いいよ、軽く話したいから、こっちにきて。」そう言われた。
その部屋の中心部に行くと、違和感があった。何故、こんなに広いのか、
1人でいるには広すぎると思った。
「んで、説得しにきたんだっけ。まぁ、討伐でもいいけど。どっちみち、結果は、わかっている
けど。」そう、少女はため息をつきながら言った。
「まぁ、場合によってはそうなる。ところで、なんでこの洞窟いるの？他にも場所があったはず
だが。」すると、彼女は
「わかってる、わかっているよ！そんなこと！けど、私魔女だから色んな所から追い出されて行
き場がないの！わかる？！」激昂して言った。
 魔女、この世界で昔は迫害され、魔女狩りだの魔女裁判などで沢山の魔女がいなくなった。生き
残った者いるが、今はそういう事がないため、世間的にも受け入れられている。一部旧勢力や過
激派もいるため、今も魔女だという事を隠して生きている者もいる。
 「いいよ、あんたも他の連中と同じで追い出したいんでしょ。だったらいいよ、やってみなよ。
返り討ちにしてあげる。」

そう言って、何か呪文を唱えた。すると、グググと大きくなっていった。そして、音がなくなった時には、天井につくかつかないかくらい大きくなっていった。
「マジかよ」
最初は、魔術とか駆使して闘うのかと思った。だが、現実は違い、物理的に大きくなり、潰しにかかるという、魔女というよりは巨人といった闘い方だった。
「まぁ、ここで殺られるわけだし、これも脱いじゃおっか。」
そう言って、カバァと口ーブを脱いだ。すると、身体の全貌が見えた。やせ細っているかと思ったら、意外とそうでもなく、かといって筋肉質でもないムチムチしている体型であり、下着は着けていて、安心した。にたぁとした顔で、完全に見下していた。
「どぉ、私の身体。すごいでしょ。」
ドヤ顔で鼻息を鳴らして、ドプンと胸が揺れた。
「じゃあ、もう思い残すことないよね！」
そう言うといきなり脚を上げ、
ドシィィィィィィィィィィィィィィン
容赦なく振り落としてきた。俺は、ギリギリで避けた。
「チッ」避けられたのか、彼女の顔つきが変わった。なんだかイラついているようにもみえた。
「ねぇ、なんで避けたの？なんで？」
「え？」
ドシィィィィィィィィィィィィィィン
「なんで？聞いてるの」
「いや、あたりま…」
「うるさい、黙れ」
完全に見下していた。そう、まるで汚い物を見るように見ていた。だが、顔の表情はかなりイラついていた。視線を入ってきた所に合わせると、突然
ズドガァァァァァァン
入ってきた所を壁を蹴って封鎖した。
「あ、逃げようとしても無駄だから。もし外に流されても困るし、バラしたらあんたを死の果てまで追うから。覚悟しといて」
さっきとは違い、冷たい言葉を吐いた。
自分でも分かる。下手に刺激したら、恐ろしい結末を迎えることになる。逃げる退路を絶たれ上に、完全に相手は機嫌が悪い。交渉どころか討伐すら危うい。俺は、一か八か交渉に賭けてみた。「なぁ、俺はあんたを倒しに来たわけじゃない。交渉しに来た」
「へぇー、交渉しに来たんだ。ここに来るみんな私を討伐しに来ているけど、あんたは違うと」
「まぁ、そうなるな。できればお互い納得した形で行けばいいけど。」
「ふーん、私は、納得してないけど」
「なら、どうすれば納得する？」
すると、二ヤリと笑って「だったさぁ、私を強さで納得させてよ。私、自分よりも強い人が好きなんだー。だから、私の出した要求に全て答えて満足させて♡」

「んで、その要求は？」
「私に参ったと言わせる事。簡単でしょ。」
「なら…」
ｽｯと腹に飛び込み、思いっ切りの一発を当てたが、効いているどころか、傷ひとつなかった。

「なにいまの、ぜんぜん痛くも痒くないんだけど。まさか、それが全力？」
　まさか、普通の人なら一撃でノックアウト出来る威力で当てた。なら、絶を纏った状態で当てればどうなるか？やってみた、すると
「うぐぅ」やっぱり効いていた。これならいける！と思った直後、
「なーに、調子乗っているの？」
　後ろからそう聞こえた瞬間、彼女の腕が振り落とされ、地面に叩きつけられた。
「確かに、今のは少し効いたよ。でも全然満足しない。それとさー、傷ひとつつけれなかったら私、キレるから」
　まずい、完全にまずい。完全に機嫌を損ねている。仕方ない、刀で傷を付けるのは、交渉では気が引けるがやるしかない。これでだめなら、最悪は覚悟しなきゃいけない。やろう、やるしかない。俺は、残っている力を全てぶつけた。が、
「はぁー、やっぱりつまらない。やっぱり、ありが人間に挑むと同じだわ。飽きたから、こっちからいくわ。簡単に倒れないでよね。クズ」
　いきなり、ガシッと掴むと、その腕を思いっ切り地面に叩き落とした。
ドォォォン
地面に叩きつけられ、起き上がろうとした時、
グォォォォォォォオオオオ
何か上から降ってくる音がした。上を見ると
「嘘だろ？！」
彼女が、座りこんできた。彼女の巨尻が、隕石のように見え、俺は防御体制に入った。そして
ゴゴゴゴゴゴゴ
ズドシィィィィィィィィィン
「うぐぅ」
　何とか耐えたが、場所が悪く、尻肉の所に入った。
「へぇー、何とか耐えたじゃん。すっごーい♡でーもー」

　ゴリィィィィィイ　　ゴリィィィィィイ
「ふふっ、耐えられるかなぁ？この重さにぃ？」
お尻を左右に動かしたために、骨が当たってさらに、きつくなる。
「あがァァ」
絶の効果で守れてはいるが、さすがに重い。ましては、彼女の尻肉に敷かれているため、逃げ場が無い。
「さてぇ、小人さんはどうなっているかなぁ？よいしょっと」
　彼女が、腰をあげた。そこは、彼女のお尻の跡が着いていて、航海は、何とか生きていたが、すぐに、彼女に摘まれた。そして、顔の前にきた。
「あんたさぁ、他の連中とはちょっと違うんだよねぇ。耐久力というか精神力というか、なんか他の連中とは違うんだよなー。まぁ、結果は、変わらないけど。」
「どういうことだ」
「まぁ、簡単に言うなら、あんたは他の連中とは違って心が折れないって事。他の連中はみーんな私の事怒らせて、気がついたら、びびって逃げ出したんだよねぇ。出口無いのに。んで、その人達ひどくってさぁ、私の事、化け物だのなんだの言ったから、頭にきたからそいつらの事跡かなも無く消し飛ばしたんだけど。」
「おいおい、まさか俺もそうなるんじゃあ？」

「いや、それは態度次第。あんたは何か違うからさぁ、色々と試したくなるというか、まぁ、ちょっとした私のわがままに付き合って♡お願い♡」

「はぁー、わかったわかった。付き合ってやるよ。その代わり、満足したら、交渉をさせてくれ」
「わかった、いいよ♪」
機嫌が良くなった彼女は、事の発端を話してくれた。簡単に言えば、ここに来るまでは母親と2人で依頼を受けた村で住んでいた。しかし、母親が不死の病に倒れて、そのまま他界してしまった。
それを好機とみた、過激派がレナを村から追放し、ここに追いやった。この空洞は、最初は狭かったらしく、無理矢理広げたらしく、人の100倍の大きさになっても動く事は出来た。そのあと、有力な能力者がここに来ては、追い返しての繰り返しだった。しつこい者もいたが、その場合は少し本気を出して、逃がした。多分、他の連中と言ってた奴は、金目当てで集まって、死を覚悟しといてなかったかもしれない。そう思った。
「これで一通り話したのか？」
「うん、まぁそんな感じ。ところでさぁ、あんた彼女いる？」
「いや待て、なぜその質問を、まぁいないけど」
「だったらさぁ、私の事、彼女してここから出して♪お願い♡」

「ちょっと待って、冗談抜きでなぜ？」
「正直ここにいるの飽きた。そろそろ、外の世界に出たいからさぁ。」
「まぁ、理由はわかった。けど、彼女する理由は？」
「だってー、あなたって他の連中と違って面白そうだから、なんか好きになっちゃった♡てへっ」
「えぇー、そんなことあるのかよ。まぁ、いいけど」
「ホントに!?ありがとう♪お礼とお詫びといってはなんだけど……」
「？」
「私の胸に飛び込んで来て♪」

「ちょっと待って、どうしてこうなる。というか、こうなった。」
「問答無用♪」
掴んでいた手を胸の方に持って来ると、谷間に落とした。
ストンと着地したが、地面は柔らかく無く、へこみもしなかった。
だが、レナが押すと柔らかくへこんだ。
「ふふっ、私の谷間にご案内♪」
半分投げやりになって、身を任せることにした。谷間の中に入り、左右にはあの爆乳があった。
すると、少しだが、心音が聞こえた。ドクン、ドクンと、規則正しくなっていった。
「さっきは、ごめんね。私、あの出来事あってあまり人を信用する事ができなかったの。だから、ああやって、煽って、テストして、話を聞いて欲しかった。でも今まで、色んな人が来ても私のこの大きさを見ると、すぐ逃げ出したんだ。だから、ここまで残った人って初めてなんだ♪」
「そうだったのか」
「だから、こうして私のわがままを聞いてくれる人がずーっと欲しかったの、1人だとさみしかったし。」

「……」
「えい♪」
むぎゅゅゅゅゅうううううう
「痛たたた、まだあんまり回復してないから」
「あ、ごめん。ちょっと待ってて」
すると、何か呪文を詠唱し、身体が楽になった。
「これでいいでしょ♪」
「ああ、楽になった。」
「そう、だったら♪」
ムニュン ムニュン ムニュン
左右から揉まれていた。意外とこれが気持ち良かった。
「よいしょっと」
やっと谷間から出て、地面に置かれた。
「じゃあ、元に戻るね」
そういうと、最初にあったサイズに戻った。
「そういえば、出口塞がっていたの忘れてた」
というと、今度は、
「まぁ、任せとけ。そぉい！」
と俺は言って塞がっていた出口を壊した。
「さぁ、行くか」
「うん♪」
その後、依頼の方は交渉成立という事にして報酬をもらった。
村に、魔女に対する過激派は、いなくなったいた。そのため、村に戻る選択もあったが
「航海の隣りで、色んな物を見たい♪」という彼女の意思で俺と同居という形で、依頼を終えた。
彼女は、VR再現した街を破壊する事に夢中になり、俺は、それを小人目線で見るという新たな楽しみを見つけた。その話は、後ほど。
こうして、俺と彼女の退屈する日がない生活が始まった。